

偉大な包容力

土屋 義彦

月日の経つのは早いもので、大平総理が急逝されてからもう一年近くにもなるのだが、あまりにも劇的な強烈なできごとであっただけに、私にはまだ昨日のここのように思えてならない。

私が大平先生に直接ご指導をいただくようになったのは、昭和四十八年、大平先生が大蔵大臣のとき、私が参議院大蔵委員長に就任してからだ。翌四十九年から五十四年秋まで、私は副幹事長として、内田、中曽根、大平、斎藤の四代の幹事長にお仕えしたが、とくに思い出深いのは福田内閣の二年間、大平先生が幹事長の時代に、それまでの党内抗争がうそのように波風ひとつたたない見事な党運営が実現したことである。

これは三木政権後の政局を『政府は福田、党は大平』という形で分担し、福田総理が思う存分に活躍できるよ、すぐれた指導力でしつかりと党を守り、表裏一体の協力をされた大平幹事長の功績が極めて大きいことを、私は側で仕えながら身をもつて感じたものであった。

縁とは不思議なもので、大平幹事長時代の五十二年十一月、大平先生の三男、明君と私の姪（上原昭二大正製薬社長の二女）吉子が結婚して、親戚の縁につながるようになった。ところがそつなってみると、今まではなんでもいっていた大平先生に、私のほうからなんとなく遠慮が出てきたものである。

大平先生とのことで、いちばん印象深いのは、なんといっても五十二年十一月の総裁公選のことである。このときは現職の福田総裁と大平幹事長の事実上の一騎打ちだったが、上原正吉夫妻は孫娘の義父にあたる大平先生

を応援することを決め、福田総理の了解までとりつけていた。しかし、私は政治家としての筋を通そうと決意し、福田総理支援に踏み切った。私の胸のなかは、まさに「忠ならんと欲すれば孝ならず」の心境であった。

結果は大平先生の大勝利に終わったわけだが、後日、私は大平邸を訪ねてお祝いを申しあげ、「このたびは上原夫妻と行動をとみにできず申しわけありませんでした」とお詫びしたところ、大平先生は「君は政治家としてのケジメをつけたんだ。立派な行為と感服している」と褒めてくれた。私は、実に清々しい気持ちで大平邸を辞することができた。そういう私を、大平総理は第二次大平内閣の組閣にあたって、環境庁長官として入閣させてくれた。就任して間もなく、環境庁の不正経理問題が会計検査院から指摘された際、私は直ちに幹部を厳しく処分するとともに「最高責任者としての私の処置は総理に一任します」と申し出た。これに対して大平総理は「立派な態度だ。これを機に綱紀を引き締めて職務を全うしてもらいたい」と、かえって激励をして下さった。

在任中、衆議院予算委員会で環境アセスメント法案の取り扱いをめぐって、関係閣僚の答弁の食い違いから審議がストップしたことがあった。このとき大平総理が「総理として法案提出に最大限の努力をする」といつて助けてくれた。この法案が、政府原案として閣議了解まで進めることができたのも大平総理のおかげである。

大平先生は、思いやりが深く、心のやさしい人だった。下落合の姪の家へ行ったときは、必ず「土屋君は本当によくやってくれている」といつてくれたそうである。また、上原正吉参議院議員の誕生日にも、いつもきて下さって、カラオケ好きの上原が所望すると快く「柔」や「人生劇場」などを唄ってくれた。ちょっとはにかみながら、それでも堂々と唄われた大平先生のお姿は、もう永久に見られない。

笑うと目がなくなつて、一本の線のようになる大平先生の笑顔が、いまでも私の脳裏にやきついている。

ご冥福を心からお祈りします。

(参議院議員・第二次大平内閣環境庁長官)